

# 佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 懐かしさ

## 在原 寿

「来年度ふる里学舎の施設長を在原にやってもらおうと思っ

ている」突然の里見理事長からのお言葉・・・。一瞬何が何だか理解できず、冷静を装っていたが、頭の中はどうしよう、でいっぱいだった。何せふる里学舎の施設長はオープンして三十年間、里見理事長が務めてきたとても大切な役職である。本当に自分で良いのか、何ができるのか、いろいろと頭をよぎったが、難しいことを考えても、自分の能力ではたかが知れている。仕方がない。最終的に思ったことは「やるしかない」だけである。

ふる里学舎には「利用者、家族、そして職員も楽しく！」という理念がある。しかし、この三年間はコロナの為に、今まで当たり前だった暮らしを制約しなければならなかった。現在、それを一つひとつ元の生活に戻すことに力を注いでいる。その中の一つに行事がある。昨年突然理事長から「九月に一泊旅行に行こう！」と話があった。コロナ前には毎年県外に一泊旅行に出かけていたが、ここ二年間は行っていない。コロナが収まりつつある状況ではあったが、世間の雰囲気はほとんど変わってお

ぼれそうになった。本当に旅行に行けて良かったと思う。利用者、そして職員も楽しんで無事に終えることができた。何よりも利用者が落ち着いており、今までの経験、体験が活かされていた。また初参加の職員達も利用者の楽しむ様子をみて、満足したことだろう。



夜は大宴会で大盛り上がり！

続いてもう一つは、家族との交流である。四月某日家族会の役員の方達と久しぶりに懇親会を行なった。三年ぶりということもあり、お互い緊張していたが、時間が経つにつれ、お酒の力もあり、昔話に盛り上がる。私たちの仕事は直接利用者と関わることはもちろんだが、家族の気持ちを汲んで物事を考えることも多い。そういった意味でも家族との懇親は大切だと思っている。また、こんな私に気を遣いながら、人生の先輩として色々と話をしてくださるのは、本当にありがたいがたく、自分自身の財産になっている。ふと以前、ある母親からこんな話を伺ったことを思い出す。「新しく入ってきた先生が自分の子供より年下だと思うと、何か複雑な気持ちになるんですよ・・・」当時若かった私は何となく聞いていたが、今この歳にな

って改めて考えてみると、子を想う親の気持ちの強さだと思ってしまう。私たちは親御さんの本当の気持ちを考えながら、これからも一緒に楽しみたい。また、それを若い職員に伝えていくことが使命だと思っている。

先日、全体作業を行った。聞かなれない言葉かもしれないが、ふる里学舎ではオープン当初から、自分の持ち場の環境整備が回らないときに、人を多く集めて一気に作業をすることを全体作業と言っている。今回は三十周年記念式典の為に、法人内の全事業所に声をかけたところ、総勢百二十名が集まった。その中には新人四十名も含まれ、東京から千倉まで全事業所から応援に駆けつけてくれている。全体作業というと聞こえがいかもしれないが、私が若いころは嫌でしょうがなかった。何故かという、全体作業を企画する側は準備にかなりの気を遣う。作業場所の設定（人が余っていないか、効率的に動いているか）、人の配置（適材適所になっているか）、道具の準備（足りているか、機械はスムーズに動いているか）昼食、お茶の準備、さらには夜の慰労会の準備までしなければならないのである。その段取りを一つひとつ確実にこなさなければならず、朝先輩が手にした刈払機のエンジンがかからないものなら、夜の慰労会で遅くまでご指導いただくことになる。作業開始時間も伝えた時間どおりに作業場所に向かうと先輩はすでに広い範囲の草刈りを終えており、恐る恐る作業に合流したこともあった。そういえばこんなこともあった。ある日の環境整備の時、朝六時の集合時間に合わせ

て作業場所につくと、当時の里見施設長が仁王立ちで待ち構えていた。その時、自分が時間を間違えたかと思い、「これは終わった・・・」とかなり焦ったことを覚えている。当時の里見施設長なりの激励を兼ねたジョークであることを知り、その日は夜のつまみには困らなかった。人間とは思えないもので、今回大掛かりな全体作業をすることなり、嫌だった全体作業が懐かしさもあり、何となく楽しみななっていた。作業日の数日前になると他事業所のベテラン職員から、本当の開始時間は何時なのかしつこく問い合わせがある。（今は予定通りの開始です）



絶好の環境整備日和！

当日は心地よい陽気の絶好の全体作業日和。新人職員はまだ機械を使用できないため、一番ハードである急斜面の草集めである。普段行なったことのない新人たちは物珍しさもあり、元氣よく動き回り、楽しそうに行なっている。ところが午後になると、動きが悪くなり、表情もこわばり、疲れ切っていた。しかし、作業を終え、山を下りて下から作業現場を見てみると、きれいになっていることが一目でわかる。達成感は半端なく、協力してやり遂げた充実感でいっぱいだ。夜は当然百二十名の慰労会である。新人たちは他事業所の同期との再会を楽しんでいる。

ベテラン達というのと疲れから一杯のビールで酔いが回っている。その後は今日の全体作業について、あーだこーだと大盛り上がり。ひとつの事をみんなで行き、みんなで成し遂げ、みんなが達成感を共有する。これは全体作業だから得られるものかもしれない。最近、理事長から行事について話がある。「準備はやるだけのことをやって当日を迎える。担当者は消化試合にしない。その行事をどうやって成功させるのかを考える」自分が若い頃嫌だった全体作業は、仕事をしていくうえで、とても大切なことが集約されているものだった。

この仕事に就き、自分も親になり、その子供達も自立した。少しずつ保護者の気持ちもわかるようになってきた。自分事だが、五年前に母親、三年前に父親を亡くした。自分にとっては何があっても優しく、味方になってくれるような存在だった。泣き虫で甘えん坊の私を「大丈夫か？」と今でも常に心配しているに違いない。子を残して死んでいく親の気持ちはわからないが、ただ、親はずっと子供のことを心配してくれているのだと思う。

ふる里学舎はオープンして三十年が過ぎた。そんな中三十年間変わらず声をかけてくれる利用者がある。「ありちゃん、今日飲みに行くぞう」と。

さあ元氣出して頑張ろう「やるだけのことをやるしかないんだから・・・」

（ふる里学舎 施設長）



